専修人文論集 113号
（2023）001-041

『本居宣長』（小林秀雄）の「詳細目録」の試み

―雑誌連載と単行本との「比較」―

佐藤雅男
専修大学文学部兼任講師

1．連載稿と単行本との異同

全集本にせよ、単行本あるいは文庫本にせよ、私達の手元に存在する『本居宣長』（小林秀雄）は、著者が昭和四十年六月から五十一年十二月まで、雑誌『新潮』に連載した活字体が版元の原稿である。昭和五十二年の『新潮』一月号に、編集部から、「長期に及んだこの連載において、読者に伝えんとする眼目はそれぞれほぼ書きつくしたので、掲載分を推敲、凝縮の上、結語を急ぎたい」（「読者へのお知らせ」）という著者の意向が通知された。それで同年の十月に、旧仮名の大部な連載稿に、かなりの削除と挿入がなされ、内容の凝縮した結語付きの『本居宣長』が刊行された。紺の布張りで、裏表紙には奥村土牛の桜が装画された単行本は、当時は随分と評判になったが、その所謂「眼目」が、明解に伝達されたかどうかは、今日に措いても疑問が残る。

近世思想史における本居宣長という国学者に関しては、他の様々な研究書にも重厚に論じられてきた[1]。私としては、さらに問題を限定して、『本居宣長』（小林秀雄）の思想表現の特質の解明を目指している。それは小林の『感想』（ベルグソン論）という哲学的文章の読解の先で、彼の近世儒学論との関連において検討すべき課題の一種である[2]。この所謂「畢生の大作」は、昭和五十四年の第四次『新訂小林秀雄全集』に旧仮名で収録され、その後、平成十四年の第五次の全集を承けて、十六年には普及版として第六次の新仮名の『小林秀雄全作品』27（上）・28（下）が刊行された。そこには他の作品と同様に語釈の脚注が附き、また活字が拡大した文庫も流布し、この作品が読み易くなったのは事実である。最初の単行本の出版以来、その代表的な小林秀雄論に、『本居宣長』に関する問題は指摘されてきた。また近年では、『本居宣長』に対象を特化した解説書も出版された[3]。

何よりも思想研究の基本は、本文を直接的に読むことであるが、此度、読みの角度を多少とも変更する手段として、デジタル的な「比較」機能を介在させ、「比較」テキストを作成した。つまり、雑誌『新潮』に連載された旧仮名の元の文書と、単行本や文庫などに収録された新仮名の文書を、新仮名に統一し、両文書を同一文書内に色付きの記号を持って並列させた。そうしたデジタル文書の「比較」による異同の検証から、いわば小林の推敲の有りようが顕在化し、これまでとは違った角度からの小林秀雄研究が可能になる。またこの長編作品には目次が無く、さらなる内容理解の手立てとして、全体の流れを順序立てて俯瞰出来るような「詳細目録」が必要に思われる。本稿では、『本居宣長』に目次を附け、全体を図式的に分解し、両文書の「詳細目録」の「比較」から、その出版までの推敲の流れを見てみよう。

2．著作の全体構成

『本居宣長』の全体像に関して、その階層構造を分析し、その成層の原型を明らかにしてみたいが、そこには厄介な問題が存在する。『本居宣長』の構成とは、整然とした樹木型ではなく、様々な絡みを持った根茎型（リゾーム）の一種だからである。中村雄二郎は、そうした思想としての「制度」のことを、「根茎型システムは、いかなる構造的モデルにも、生成的モデルにも属さない。それは生成軸や深層構造という観念とも無関係である。それは、その都度読み取り線の変わる、多数の出入口を持ち、諸々の脱出線をそなえた地図に似ている。」（『述語集』23「制度」）と解説する。『本居宣長』とは、こうした問題に関連し、所謂「無構造」の構造の一種だとしても、決してそれ自体が無意識的な構成では有り得ない。

『本居宣長』（五十）の結びは「もう、終りにしたい。結論に達したからではない。私は、宣長論を、彼の『遺言書』から始めたが、このように書いて来ると、又、其処へ戻る他ないという思いが頻りだからだ。ここまで読んで貰えた読者には、もう一ぺん、此の、彼の最後の自問自答が、（機会があれば、全文が）、読んで欲しい、その用意はした、とさえ、言いたいように思われる。」で終わる。つまり読了しても、作者から、さらに本書を再読しない限り、その意味は判然としないと論され、ある種の循環的時間が要求される。こうした「結語」を、気の利いた修辞的表現と受け流せばそれまでであるが、もう少し拘って、第（一）回だけでも精読せよ、そうすれば全体を理解出来るという様に直に解し、「遺言書」に限定して論じる手もある。だがそれも研究の一つには違いないが、近世の様々な「思想劇」に触れる道ではない。むしろ、（五十）回の「死者は去るのではない。還って来ないのだ。と

言うのは、死者は、生者に烈しい悲しみを遺さなければ、この世を去る事が出来ない、という意味だ。」という思想表現に衝迫され、その内部反響に在る者は、また回帰的な読み直しに誘われるように出来ている。小林は、この「歴史の魂」に関する深遠な問題を別の所では、むしろ軽快に「本の広告」と称して、次のようにも語った。

私の文章は、ちょっと見ると、何か面白い事が書いてあるように見えるが、一度読んでもなかなか解らない。読者は、立止ったり、後を振り返ったりしなければならない。自然とそうなるように、私が工夫を凝らしているからです。これは、永年文章を書いていれば、自ずと出来る工夫に過ぎないのだが、読者は、うっかり、二度三度と読んで了しまう。簡単明瞭に読書時間から割り出すと、この本は、定価一万二、三千円どころの値打ちはある。それが四千円で買える、書肆としても大変な割引です、嘘だと思うなら、買って御覧なさい、とまあ、講演めかして、そういう事を喋った。（「本の広告」昭和五十四年四月）

この文章の意図は、『本居宣長』という著書は、一回の読みでは意味不明でも、物理的に三回ぐらい読み返せば、その元の値打ちは取れるというものである。長いので一気には読めず、やはり難解な箇所では立ち止ったり、振り返ったりしなければならないであろう。うっかりと読むのでは、とうてい了解の不可能な文章である。しかし、そこに目次があれば、また何処からでも自由に出入り可能な地図を所持したことになる。

近年、『小林秀雄の悲哀』（橋爪大三郎）で、『本居宣長』の本格的解明の先鞭が切られた。橋爪は「この作品は、本居宣長を焦点とするが、実際は江戸思想を総覧するにひとしい、大がかりな仕事である。江戸思想の多くの資料や文献を渉猟し、従来の読者にはついて行き難くかったかもしれない。」と言う。そして、『本居宣長』の（五十）

の全回に、題目を付けて、各（章）毎に要約する。其々の読みにおいて、全体像は無意識に抱かれるが、『本居宣長』の分析的な図式が明瞭に提起されたことは余りなかった。そもそも著作自体に目次が無く、その全体像に関しては、雑誌連載の最終回にされ、単行本の下巻末にも付加された江藤淳との精妙な対談の解説に負う所が多かったとも言える。その中で、小林は、「イマージュ」を「映像」と訳すよりも、宣長が使った「かたち」という言葉の方が、その意味が余程しっくりとし、『古事記伝』に、「性質情状」に「アルカタチ」と仮名が振られている例などを挙げて、「『物』に『性質情状』です。これが『イマージュ』の正訳です」（「宣長とベルグソンの本質的類似」）と言う。『感想』と同様に、『本居宣長』の構成にも、螺旋的に循環する「アルカタチ」が感得され、それは同時に「あやしさ」の「かたち」でもある。こうした本質的に謎の多いテキストの解明は、その読みを丹念に行うしかないが、そこには次第に揺れ動くような図式も発見されて行くであろう。次に橋爪の要約の方は省くが、所謂「仮につけたタイトル」の部分を引いてみよう。

一（葬儀のこと）、二（葬儀のこと・続）、三（宣長の生涯）、四（学問の系譜）、五（好信楽）、六（契沖のこと）、七（契沖の生涯）、八（中江藤樹のこと）、九（新学問）、十（仁斎から徂徠へ）、十一（宣長の学者生活）、十二（あしわけ小舟）、十三（もののあはれ）、十四（式部と宣長）、十五（「もののあはれ」と道）、十六（準拠説）、十七（諸家の源氏評）、十八（歌としての歌物語）、十九（冠辞考）、二十（師弟の交流）、二十一（頓阿）、二十二（歌を詠む道）、二十三（おのがはらの内の物）、二十四（詞の玉緒）、二十五（やまと心）、二十六（篤胤のこと）、二十七（和歌と和文）、二十八（文体と訓法）、二十九（漢文と口承）、三十（古のふり）、三十一（白石と宣長）、三十二（徂徠その1）、三十三（徂徠その2）、三十四（目に見えないカミ）、三十五（言

語共同体）、三十六（歌に師匠なし）、三十七（おのずからなる道）、三十八（カミとは）、三十九（カミの名）、四十（日神論争）、四十一（古学の眼）、四十二（最上の史典）、四十三（神の歌と物語）、四十四（神の道）、四十五（真淵の訓読への論難）、四十六（古言と雅言）、四十七（あやしからざる）、四十八（言伝えの徳）、四十九（「古学の眼」より）、五十（皆よみの国へ行く）。

これらの橋爪が付けた題目は、『本居宣長』の全体像を整理する。だが、小林の付した（一）～（五十）とは、（一回）～（五十回）のことであり、決して橋爪がタイトル表記に使用した章立てではなかった。また、小林の（回）数には、対象や方法に関する主題の筋が跨る場合が多く、（回）の途中で、その主題も変化する。それはまさに（回）以外にも、複雑な出入口を持った構造なのである。それで、（回）番号は、小林自身が付けたものであり、共通の読解には必須項目であるが、それには余り捉われ過ぎずに、単行本『本居宣長』の内容を読解し、「詳細目録」を模索した。

そこから暫定的に言えるのは、全体構成の形式は、大きくは序と第一篇～第九篇に分けられる。それらは内容的に一章～三十五章に区分され、さらに各章は各節に分割され、そこに小分けされた各段落が収まっている。それで各篇や各章及び各節と小分け段落の部分には、その主題や小林の使用した言葉や引用句をそのまま抽出し、題目として附した。様々な漢文・古文の引用も、その一部と見做した。細かくなったので目次と言うよりも、やはり「詳細目録」と呼ぶのが適当であろう。こうした「詳細目録」の模索は、かつて『感想』（ベルグソン論）でも試行し、そこから小林の使用した主要な概念の文脈が確認出来る『用語索引』を作成した。だが、『感想』の方は、元々単行本が存在せず、小林の遺構に反して全集に収録された『新潮』連載の一種類しかない。[4] それに対して、『本居宣

長』には、雑誌連載と単行本の二種類があり、「比較」を旧仮名と新仮名のどちらで実行するか、あるいは膨大な漢文・古文の所在明記などの問題があり、この目録は一般的な有用性からは掛け離れてしまった。それでここでは取り敢えず、雑誌連載稿と単行本の「詳細目録」の「比較」に先立って、新潮文庫を元に、篇と章立てとに限定した目次を掲げてみよう。

『本居宣長』「目次」（新潮文庫、平成四年、上・下）

〈上巻〉

（一）序　折口信夫への訪問……9
第一篇　宣長の生涯……10
一章　『遺言書』（二）（三）二章　宣長の生涯（五）三章　「好信楽」（六）
第二篇　江戸の新学問……58
四章　契沖（七）（八）五章　中江藤樹（九）六章　伊藤仁斎（十）七章　荻生徂徠
（十一）八章　本居宣長（十二）
第三篇　宣長の「もののあはれ」……131
九章　『あしわけをぶね』（十三）十章　「もののあはれ」（十四）（十五）（十六）
十一章　准拠説（十七）十二章　諸家の『源氏』論（十八）（十九）
第四篇　国学者の交流……224
十三章　賀茂真淵（二十）（二十一）（二十二）十四章　歌を詠む道（二十三）

十五章　「文ある辞」（二十四）十六章　『詞の玉緒』（二十五）十七章　「やまと心」（二十六）
十八章　平田篤胤（二十七）
第五篇　漢字の受容と和文の成立……330
十九章　和歌と和文（二十八）二十章　『古事記』『日本書紀』（二十九）
二十一章　和訓の発明（三十）
第六篇　宣長の方法……376
二十二章　『古事記』の撰録　二十三章　古のふり
〈下巻〉
二十四章　新井白石（三十一）（三十二）二十五章　荻生徂徠（三十三）（三十四）
二十六章　言霊（三十五）二十七章　言語による共同体（三十六）
二十八章　歌を詠む事（三十七）
第七篇　迦微とは何か……87
二十九章　おのずからなる道（三十八）三十章　『古事記伝』（三十九）（四十）（四十一）
三十一章　上田秋成（四十二）（四十三）（四十四）三十二章　賀茂真淵の「神の道」（四十五）（四十六）（四十七）
第八篇　「あやしさ」の「かたち」……197

三十三章　『古事記』の注釈（四十八）（四十九）三十四章　上田秋成との論争
（五十）
第九篇　宣長の死生観……236
三十五章　生死の経験

3．デジタル文書での「比較」検討

昭和五二年十月に単行本が出版された時に、その編集を担当した池田雅延が、当時の作業工程を語った文章がある。（「小林秀雄『本居宣長』全景」）それを引用してみよう。

まずは、単行本化のために著者が行う加筆用の土台造りである。今日幅をきかせているパソコンやデジタル・データは、普及はおろか影も形も見せていなかった。雑誌や新聞に連載された著作を本にしようとすれば、連載中から掲載ページの切抜きをとっておき、それらを一頁分ずつ四百字詰の原稿用紙の真ん中に貼っていく。著者は編集者からその貼り込み原稿を受け取り、余白に新たな修整文を書き込むなどして編集者に返す。編集者はその書込み稿を整理して印刷所に送り、本としての新たな活字の組上げを頼むのである。『本居宣長』の切抜きは、五十一年十一月中に貼り込みを終え、十二月の末、暮の挨拶に参上した席で小林氏に託した。当時、ふつうの本であれば、本文の字数は一冊あたり四百字詰原稿用紙で四、五百枚から七、八百枚というのが標準であった。したがって、著者の書込みは、貼り込み稿を預けて二、三週間もすれば一度で編集者の手に戻って

きた。しかし、『本居宣長』は、『新潮』掲載稿が合せて千五百枚分はあった、しかも、内容は、本居宣長の原文引用も夥しければ小林氏の行文も緻密である。とても一気呵成にというわけには参らない。そこでこういう手筈を調えた。『新潮』掲載の千五百枚分をざっと三等分し、これらを順次、小林氏から返してもらう、私はそれをただちに印刷所に送り、印刷所から校正刷を出してもらい、校正者には校正作業を始めておいてもらう、この段階での著者修整は、彫刻でいえば粗彫りに留め、細部の彫琢には印刷所が活字を組上げてからの校正段階で時間をかける……、この手筈を氏も諒とされた。

小林がその推敲の手順を、「粗彫り」と「細部の彫琢」に分けていたことなど興味深い。さらに、編集者の池田は、「『新潮』の掲載稿に削除が加わり、四百字詰原稿用紙にして千五百枚分が約千枚分の校正刷になった」と言う。要するに『本居宣長』は元の原稿の三分の二に縮小されたのであった。

私は十数年ほど前から、雑誌『新潮』に連載された「本居宣長」を図書館で全文コピーした冊子を所持していた。それは、一頁に26文字23行の縦書き二段であり、雑誌の頁をひろげてコピーすれば、A4用紙に4頁が収まる体裁である。小林秀雄の特質として、既に発表した文章を、かなり修正して全集などに収録することは周知である。全集の別巻Ⅱの「批評への道」にもあるように、『新潮』の連載回数は（六十四）回である。だがその、（三十四）（三十五）（四十二）（四十三）（四十四）（四十五）（四十六）（五十一）（五十五）（五十九）（六十）（六十一）の回が削除され、単行本の最終回の（五十）が、新たに書き下ろされ、『本居宣長補記』が追加された。

今日のデジタル社会においては、『新潮』連載稿と単行本の「比較」が、商品化とは別個の研究水準で可能になった。オフィス・ワードやアドビ・アクロバットの「校閲」に「比較」機能があり、大量な文章でも、打ち込みさえ

すれば、その元の文書と変更された文書の「比較」が色付きで視覚化される。試行錯誤した末に、やはり縦書き文書にはワードが適切と判断した。それで雑誌『新潮』の文書は旧字体を、操作結果に不規則の少ない新字体に直し、単行本の新字体に統一して「比較」した。「詳細目録」は初めから作成しようしたわけでもなく、そうした作業過程で、目印としての目次が必要になった。それで「比較」された「詳細目録」と本文の二つの文書が出来た。

先ずは雑誌と単行本の「比較」における大体の形式上の異同の流れを述べて措こう。雑誌には、（一）から（九）までに、学術論文的な（註）が施された。だが、それも単行本からは削除される。前半の（二十七）まで、字句の訂正がかなり施され、新たな挿入文もあるが、雑誌と単行本の構成はほぼ同様であり、（回）の照合も一致する。しかし、（二十八）と（二十九）から、多少とも変化して、それ以降の（回）の番号に差異が生じる。雑誌（三十）は、単行本（二十九）になり、雑誌（三十一）の途中から、単行本（三十）の冒頭になる。雑誌（三十二）は、単行本（三十）と関連するが、単行本の上巻「（一）～（三十）」が、下巻「（三十一）～（五十）」に移行し、雑誌（三十二）（三十三）の辺りから、雑誌と単行本の照合に見分けがつき難くなる。文庫本などが上下に分割されているのは、その意味で道理がある。その後、雑誌の（回）の全文削除が目立ち始め、さらに単行本の（五十「最終回」）が、他回の二倍の分量で付加される。雑誌の（削除回）は、（三十四）（三十五）（四十二）（四十三）（四十四）（四十五）（四十六）（五十一）（五十五）（五十九）（六十）（六十一）の十二個である。全体的には、「迦微」に関する論述の位置の移動や、荻生徂徠や折口信夫そしてフロイトなど関する論述が大幅に削除され、あるいは凝縮された点が顕著である。また「新潮」に『感想』や『本居宣長』を連載した時期には、同時に様々な近世思想家論が書かれた。[4]

また、全体構成において、『雑誌』と『単行本』の（回）の跨りを含んだ明らかな（回）毎のズレがあり、それ

もここに表記して措こう。雑誌の（三十六）は（三十二）に、（三十八）は（三十三）になり、（四十一）までは、単行本の（回）は五つ程数が若くなる。その後、雑誌に大幅な削除がされ、（四十七）は単行本の（三十七）と照合し、雑誌（五十）までは、十つ程数が若くなる。（五十二）は（四十一）に照合し、（五十四）までは、十一つ程数が若くなり、（五十六）が（四十四）になり、（五十八）までは、同じ傾向である。先にも触れたが、（五十九）から（六十一）まで大幅な削除がある。そして（六十二）が（四十七）になり、（六十四）が（四十九）と数が若くなる。雑誌の連載はそれで終了するが、単行本には（五十）の回が最終章として追加された。本稿の『本居宣長』の「詳細目録」を見れば、凡その校正の有りようは確認出来るであろう。恐らく著者の望む所ではなかった事であろうが、作品の所謂「眼目」を理解してみたい苦肉の策として受け止めて頂き、その区分の仕方や、題目に関する事柄が不適当との御指摘があれば、それを吟味しながら、随時に修正して行きたい。

5．「詳細目録」の提示

凡例

＊其々の目次の題名は、小林が使用した固有名詞やキーワードあるいはキーセンテンスと見做せるものを、「比較テキスト」の各篇・各章・各節・小分け部分の段落に引いた。

＊○は、多少の漢文・古文の引用。◎は、分量が、はっきりと多い漢文・古文の引用である。

＊―書簡（『稿本全集』十）の中央の線は、雑誌連載からの削除であり、孔孟という人格の右横線は、単行本への挿入である。（三十）の二重取り消し線は、移動の削除であり、（三十）の二重線は、移動の挿入を示す。尚、本

文の「比較テキスト」は、削除が青線、挿入が赤線、移動が緑線に区別されるが、本稿では論文の投稿規定に従って本稿では色分けをしていない。

＊この「詳細目録」の「比較テキスト」では、「元の文書」を雑誌連載とし、「変更された文書」を単行本として、それらを新仮名に統一し、ワードの校閲で「比較」した。雑誌『新潮』に連載された「本居宣長」は、一頁に26文字23行の縦書き二段であり、ワード文書もその形式に統一し、B５用紙に印刷出来るようにした。また、「比較」機能の不規則性を回避するために、「元の文書」の段落は任意に変更し、ハイフンなどの記号も除去した。

本居宣長（詳細目録）

小林秀雄

（一）

序（折口信夫宅への訪問）―『古事記』『古事記伝』『源氏』

第一篇　宣長の生涯

一章　『遺言書』

一節　伊勢松阪の人　1、山室の妙楽寺　2、墓碑の図解―○『玉かつま』六　二節　送葬の次第　1、検死人の手記―◎『遺言書』　2、死骸の始末　3、戒名―書簡（『稿本全集』一二）　4、「申披六ヶ敷筋」の思想―（岩波版『本居宣長全集』月報五）　三節、肖像画　1、墓参と法事　2、自画自賛の肖像画　3、桜との契り　4、歌集の

後記―◎『まくらの山』

（二）

四節　信念の披瀝　1、遺言の終りの文句―○『遺言書』　2、自分の葬式を、文章の上に出すこと　3、◎養嗣子大平の『日記』　五節　死生観　1、『問答録』の死生観　2、宣長の辞世―○『本居宣長大人伝』（川口常文）『霊能真柱』『伊勢物語』○『勢語臆断』○『玉かつま』五　3、七十歳の宣長　4、一と筋の道　六節、思想劇　1、思想の一貫性―『本居宣長』（村岡典嗣）　2、自己との全的な共感　3、生れつきという言葉　4、宣長の演じた思想劇

（三）

二章　宣長の生涯

一節　商家小津家　1、◎『玉かつま』（伊勢国）　2、初心を貫いた人　二節　享保十五年（一七三〇年）生れ　1、自家の歴史―◎『家のむかし物語』　2、町人心　3、学問をねがう心　4、◎『家のむかし物語』　三節　小児科医の開業　1、本居の姓　2、仁斎の言葉―◎（「送三片岡宗純還二柳川一序」）　3、松阪の鈴屋　4、学問をする事　5、京都遊学からの帰郷―『日記』『日録』　四節　済世の仕事　1、◎「薬の広告文」―「松阪の追懐」（佐佐木信綱）　2、『済世録』

（四）

五節「物まなびの力」　1、◎『家のむかし物語』　2、仕官の話―『秘本玉匣』　3、文の姿という事―○「国学の学頭」○「春村への報告」　4、彼の告白　六節　学問の系譜　1、○「恩頼図」―『玉かつま』八　2、『玉かつま』二　3、思想の源泉　七節　契沖　1、『玉かつま』二　2、契沖という人に出会った事　八節　堀景山

1、堀景山の塾　2、○『不尽言』　3、○『在京日記』「宝暦六年、十二月二十六、七日」　4、創造的な思想家

（五）

三章、「好信楽」

一節　孔子という人間　1、◎宣長の「書状八通」　2、「好信楽」という態度―「宝暦七年三月、上柳敬基宛」　3、「自然ノ神道」　4、聖人の道　5、『先進第十一』　6、「孔子といふよき人」―『玉かつま』十四　7、『公冶長第五』―『論語徴』丙　8、孔子という人の心　9、「小人」の立てた志　10、孔子の「楽」という言葉の深さ

（六）

第二篇　江戸の新学問

四章　契沖

一節「大明眼」　1、◎『あしわけをぶね』　2、契沖の万葉研究への通暁　3、契沖の「大明眼」　4、「やすらかに見る」―○『紫文要領』　二節　歌学と歌道　1、◎『あしわけをぶね』　2、大歌学者の凡庸な歌　3、◎『玉だすき』九　4、詠歌　5、「性ナリ癖ナリ」の風体　6、◎『うひ山ぶみ』　7、詠歌は歌学に必須の条件　三節　学問の方法　1、◎『あしわけをぶね』　2、みづからの眼　3、「学びのようの法」―◎『うひ山ぶみ』　4、◎『あしわけをぶね』　5、「考える」という言葉の意―『玉かつま』

（七）

四節　契沖の生涯　1、◎契沖の『遺文』―『漫吟集類題』十二『勢語臆断』　2、契沖の生立ち―「円珠庵契沖阿闍梨行実」（安藤為章）◎「録二契沖師遺事一」（僧義剛）　3、下河辺長流との交遊―『契沖和敦延宝集』雑歌

4、◎『漫吟集類題』二十　5、「さそりの子のような」境遇―『漫吟集類題』十八・二十・十　6、二人の唱和の心　五節　契沖の歌学　1、『万葉代匠記』の起稿―○『代匠記初稿本』○『厚顔抄』序　2、◎『書簡集』―『契沖全集』十六　3、「やまとだましひなる人」―◎『勢語臆断』○『玉かつま』五　4、◎『遺言状』

（八）

五章、中江藤樹

一節、戦国時代　1、戦国の余震　2、群雄割拠　3、「下剋上」―『大言海』4、精神界の劇　二節　中江藤樹の生立ち　1、80d学問上の天下人―○「岡山先生示教録」○「送二岡村子一」　2、藤樹の伝記　3、◎「藤樹先生年譜」―「六年庚申。先生十三歳」　4、「体認」と「体察」―『翁問答』5、言葉にゾントという事―○「岡山先生示教録」三節　林羅山と中江藤樹　1、林羅山　2、二つの血脈　3、「藤樹先生年譜」の文体―○『藤樹先生行状』○『大学解』　4、吾が「身」を頼む生活術　5、「此身同ジトキハ、学術モ亦異ナルコトナシ」―○『大学解』

（九）

四節　新学問の運動　1、学問の独立　2、学脈の継承―『翁問答』改正篇　3、学問界の豪傑―「与二森村伯仁一」『翁問答』改正篇『集義外書』　4、『論語』の訓詁―「論語郷党啓蒙翼伝」

六章　伊藤仁斎

一節　古義学　1、孔孟の血脈―『語孟字義』下『読宋史道学伝』　2、「学ンデ之ヲ知ル」と「思テ之ヲ得ル」―『集義和書』二　3、白骨ノ観法―『先府君古学先生行状』　二節　仁斎の心法　1、「熟読翫味」―『同志会筆記』『語孟字義』2、孔孟という人格自証の事実法

（十）

三節　『論語』の姿　1、「最上至極字宙第一書」―○『童子問』　2、「手ノ舞ヒ、足ノ踏ムトコロヲ知ラズ」―『論語古義』○『古学先生文集』六

七章　荻生徂徠

一節　仁斎から徂徠へ　1、豪傑な学者―「与二伊仁斎一」『徂徠集』廿七」　2、古文辞学―○『弁名』下◎『答問書』下　3、「文辞」書語という「事実」

二節　精神の印し　1、―○『答問書』上○『学則』一○『学則』四、○『答問書』下　2、二節―一種の芸談

1、◎『答問書』下2、経学という実―『弁道』『弁名』上3意味不明の碑文

（十一）

三節　古学の運動　1、自己の内的経験　2、過去の遺産の蘇生　3、学問の在ったがままの姿

八章　本居宣長

一節　古書の模倣　1、学問の根本は模倣にある　2、宣長の学者生活―『和歌史の研究』（佐佐木信綱）　3、好学心―『玉かつま』二『稿本全集』、第二輯『日記』『家のむかし物語』　4、如何に生くべきかという「道」―○『童子問』上○『気吹舎筆叢』

（十二）

二節　平明な文体　1、無私な態度―◎『玉かつま』七○『仁斎日札』　2、文体の奥行　2、学問は平明を旨とする―『仁斎日札』○「封二西肥水秀才問一」○「答二屈景山一書」（徂徠）　3、文体の魅力

第三篇　宣長の「もののあはれ」

九章　『あしわけをぶね』

一節　真淵の門人　1、真淵に入門する以前　2、在京時代―『紫文要領』　3、「歌の事」から「道の事」　二節『あしわけをぶね』の姿　1、宣長の初心―○『うひ山ぶみ』　2、契沖によって抑制された風雅論―「風雅」の限界道―◎『あしわけをぶね』　3、歌の自立した道―○『万葉代匠記』（雑説）　4、◎『あしわけをぶね』

（十三）

十章　「もののあはれ」

一節　『土佐日記』から『源氏物語』へ　1、『土佐日記』―『古今集』序『日本文学の戸籍』（折口信夫）○『石上私淑言』一　2、◎『安波礼弁』　3、「物のあはれを知る心」―○『玉の小櫛』二　4、現に在るがままの表現性―◎『紫文要領』下『玉の小櫛』二　5、無私な全的な共感　6、「めでたき器物」―『玉の小櫛』二『紫文要領』下　二節、「蛍」　1、物語の本意―◎『紫文要領』上『論語』（雍也篇）　2、式部の「下心」

（十四）

3、大作家の創作意識―『源氏物語』　4、「時のならひ」

三節　「物のあはれ」という言葉の意味　1、「あはれ」の用例―『石上私淑言』一、○『紫文要領』下　2、全的な認識力―『紫文要領』下、○『紫文要領』上　3、「欲」と「情」―『あしわけをぶね』　4、「まめなる」と「あだなる」―『紫文要領』「帚木」（雨夜の品定）　5、「物のあはれ」を知る「よき人」―「夕霧」　6、「有り難き」理想

（十五）

四節　「もののあはれ」と「道」　1、「後見の方の物のあはれ」―『紫文要領』「品定」　2、「あはれ」の「理」　3、「人の情の有りよう」　4、「見るにもあかず」　五節　浮舟入水　1、宣長の下心―『紫文要領』下　2、作者の濃密な夢―『玉の小櫛』九「夢浮橋」「宇治十帖」　3、「浮舟巻」と「手習」―『玉の小櫛』九　4、浮舟というあわれな女性

（十六）

十一章　准拠説

一節　『源氏』評論　1、宣長の率直―「蛍」　2、文学の埒外にあった物語―『紫文要領』上『玉の小櫛』『三宝絵』（序）「絵合巻」　3、紫式部堕地獄伝説―『更級日記』『無名草子』　4、『源氏』評価の流儀―『玉の小櫛』一『湖月抄』　二節　故事来歴を踏まえた物語　1、直知の世界―『花鳥余情』『更級日記』『河海抄』『明月記』『玉の小櫛』一　2、作者の「心ばへ」の価値―○『紫文要領』上『湖月抄』『方等経』『日記』　3、物語の魂―『史記』『日本紀』「蛍」「帚木」「桐壺」

（十七）

十二章　諸家の『源氏』論

一節　「物語の大綱総論」　1、「帚木」の冒頭―『玉の小櫛』五　2、『源氏』の愛読者―『河海抄』　二節　諸家の源氏評　1、契沖の『源氏』―『源註拾遺』（大意）　2、真淵の『源氏』―『万葉代匠記』『帰命本願抄言釈』上『伊勢』『大和』『大和物語直解』序文『源氏物語新釈』『湖月抄』「書簡」、宝暦五年、鵜殿余野子宛『万葉考』『紫家七論』　3、秋成の『源氏』―『玉の小櫛』『新釈』『紫文要領』「ぬば玉」「賢木の巻」『雨月物語』「雨夜の物語」「蛍」　三節　現代作家の源氏評　1、谷崎潤一郎『雲後庵夜話』―「細雪」　2、正宗白鳥『文学評論』―『源氏』

（英訳ウェレイ）

（十八）

3、詞花言葉を翫ぶ　4、写実小説と考えられた『源氏』―『小説神髄』（坪内逍遥）『玉の小櫛』一　5、宣長の「手枕」―○『あしわけをぶね』「空蟬」「夕顔」　四節　「歌物語」　1、歌としての「歌物語」―○『紫文要領』下　2、「魔」は「物の哀」をさます―『紫文要領』下『河海抄』『紫家七論』『日記』　3、「物のあはれを知る」人間の像―「雨夜の品定め」『玉の小櫛』八『紫文要領』下「若菜」上「雲隠」○『紫文要領』上・下

（十九）

第四篇　国学者の交流

十三章　賀茂真淵

一節　『万葉』体翫　1、◎『玉かつま』二―『徂徠先生問答書』下『万葉』『万葉解通釈并釈例』　2、「歌まなび」から「道のまなび」へ―『源氏』『古事記伝』　二節　『冠辞考』　1、枕詞―◎『冠辞考』　2、歌の調べ―『万葉』3、真淵の直観―『冠辞考』　4、メタフォーアの価値―『源氏』「桐壺」『万葉集』『あしわけをぶね』『玉かつま』八　5、宣長の枕詞に関する考え

（二十）

三節　師弟の交流　1、師弟の間の文通―『本居宣長大人伝』（川口常文）『万葉集』○『万葉集問目』十一『続日本紀宣命』　2、日暮れて道遠きに悩む老学者―『万葉集大考』『万葉考』三、『古事記伝』◎宣長の日記（明和六年十二月四日）　3、「ますらをの手ぶり」―○『万葉集大考』　4、「道」の究明―『万葉考』六序、「明和四年十

一月十八日、宣長宛」　5、真淵のダイモン―○『万葉集大考』　四節　破門状　1、『古事記』という壁―◎斎藤信幸宛書簡『古事記伝』『稿本全集』古事記伝功程表『万葉』『源氏』◎「明和二年三月十五日、宣長宛」『玉かつま』　2、内に秘めた自信　3、真淵の感情

（二十一）

4、再入門の誓詞―『鈴屋集』六（明和四年正月五日）（稿本全集、詠草添削）「明和三年、宣長宛」『あしわけをぶね』　五節　頓阿　1、『草菴集玉箒』（明和六年正月廿七日）―『玉箒』序　2、平明な注釈―『古今集遠鏡』　3、宣長の和歌史論―◎『あしわけをぶね』　4、歌の伝統の姿　5、『新古今』の姿の直知―○『うひ山ぶみ』

（二十二）

十四章　歌を詠む道

一節　歌の伝統の姿　1、◎『うひ山ぶみ』　2、宣長の明瞭な現代意識―『花月草紙』十　3、歌学者としての明瞭な歴史意識　二節「言辞の道」　1、歌固有の価値　2、歌という「言辞の道」―◎『あしわけをぶね』　3、「コトバ第一ナリ」　4、悲しみを詠むとは、悲しみを晴らす事

（二十三）

十五章　「文ある辞」

一節　「なげく」　1、声を長く引く―◎『石上私淑言』一　2、言葉が生れ出る母体　3、「感は動也」―『玉の小櫛』二　二節、悲しみの型　1、「実情を導く」その「しかた」―『あしわけをぶね』『石上私淑言』一　2、「低き所を固める」　3、古典や伝統に対する愛や信という事　4、「おのがはらの内の物」―『古今集遠鏡』一　5、「語釈は緊要にあらず」―○『うひ山ぶみ』

（二十四）

十六章　『詞の玉緒』

一節　「てにをは」の研究　1、自由に話される音声言語　2、言語の伝統　3、「てにをは」―『あしわけをぶね』二節　宣長にとっての『源氏』　1、宣長の『源氏』経験―『紫文要領』　2、人生という主題―○『紫文要領』「答二屈景山一書」

（二十五）

十七章　「やまと心」

一節　「大和魂」の用例　1、真淵の「やまと魂」という言葉―『爾比末奈妣』『後拾遺和歌集』『源氏』「乙女」○『源氏物語新釈』　2、『源氏』の中の「大和魂」の用例　3、生活の知慧―『今昔物語』二十九　4、心ばえとか人柄とかに重点を置いていた言葉5、「皇国の道」「人の道」を体した心―◎『うひ山ぶみ』『玉の小櫛』二節　古道に関する主張　1、『直毘霊』―『古事記伝』『胆大小心録』中）『宇比山踏』「国歌八論斥非再評の評」『国歌八論』『斥非』『斥非再評』

（二十六）

十八章　平田篤胤

一節　真淵の「調べ」　1、「低きところ」の固め方―『万葉』『万葉大考』　2、国学の四大人　二節　篤胤の本居入門の事　1、享和元年入門説―『宣長と篤胤』村岡典嗣『霊の真柱』『毀誉相半』　2、篤胤の古道　3、文事の経験―『うひ山ぶみ』『玉だすき』七『伊吹於呂志』上『留魂録』（吉田松陰）『武士道』（新渡戸稲造）　三節　『勢語臆断』と『東鑑』　1、辞世なるものの実物見本―『玉かつま』五『玉かつま』　2、時頼の遺偈の姿―『吾妻鏡

騒動記』（益田宗）『増集続伝灯録』

（二十七）

第五篇　漢字の受容と和文の成立

十九章　和歌と和文

一節　和歌　1、言語伝統の流れ―『勢語臆断』『三代実録』『続日本後紀』　2、「言霊のさきはふ」道―『詞の玉緒』　3、和歌の道―『懐風藻』○『古今』『続万葉集』『伊勢』

二節　和文　1、和歌から和文への移り行き―○『土佐日記』『古今集』の「仮名序」『続日本後紀』

（二十八）

二十章　『古事記』『日本書紀』

一節　文体と訓法　1、原文の「文体」　2、「歌まなび」と「道のまなび」との問題―『玉かつま』『あしわけをぶね』○『うひ山ぶみ』　2、「学問の本意」―○『古事記』『日本書紀』　3、『古事記』と『日本書紀』の文体―『漢書』『蕃書』　4、正史としての体裁―『古事記伝』一「明和五年三月十三日附、宣長宛書簡」『冠辞考』「附言」

二節　「記の起り」1、『古事記』序　2、阿礼の誦み習い　3、○「文体の事」4、朴とでも言うより他はないその味わい

（二十九）

三節　折口信夫の『上世日本の文学』　1、祝詞と宣命　2、助辞の問題―『出雲国神寿詞後釈』『大祓詞後釈』『続紀歴朝詔詞解』『万葉再問』『続紀宣命』『古事記伝』「訓法の事」　3、『古代日本人の感覚』　4、学者常識と歴史

的事実―『大鏡』『増鏡』　5、「御名を語る」こと―○『日本紀』　6、「古代人の持った芸術心」

（二十九）

二十一章　和訓の発明

一節　津田左右吉の記紀研究　1、『神代史の新しい研究』―○『古事記』『古事記伝』

二節　宣長の『古事記』研究　1、「辞」という言葉の意味　2、「詞の文」　3、「文体」を分析して、「訓法」を判定する仕事　三節　和訓の発明1、日本文学　2、上代人の言語生活上の異変　3、模倣は発明古語に秘められた言霊の母力

（三十）

第六篇　宣長の方法

二十二章　『古事記』の撰録

一節　言伝えと書伝え　1、◎『くずばな』上2、歴史上の言伝えと書伝えとの優劣―『直毘霊』『まがのひれ』『書紀』『春秋』『史記』◎『くず花』下3、『古事記』撰録の理由―『日本書紀』　4、天武天皇の「哀しみ」―『平家物語』　5、「言霊のさきはふ」伝誦の国―『古事記』（三十一）　3、「勅語の旧辞」

二十三章　古のふり

一節　『古事記』の「文体」　1、文体の乱脈『古事記』序　2、「何とかやことたらはぬこゝち」―『古事記伝』『本居宣長の研究』（笹月清美）　3、宣長の倭建命の物語の訓―◎『古事記伝』二十七『石上稿』詠稿十八　4、生きた「言霊」の働き（単行本の三十一が始まる）

（三十一）

二節　『古事記伝』　1、『古事記伝』の完成　2、「古へを明らめる」という事　3、歴史を知るとは、己れを知る事

二十四章　新井白石

一節　『古事記』の神代之巻　1、新井白石の『古史通』―「古史通或問」『大日本史』『本朝通鑑』『古史通』（読法・凡例）　2、「朴質の言」（三十三）　3、白石の「神とは人なり」―◎『古史通』一　4、神話の史実への逐字訳　5、宣長の吟味―『常陸風土記』　6、「意」と「言」と「事」とは「相称ふ」―『古事記』　二節　「迦微」という言葉　1、宣長の『記伝』―◎『くず花』　2、宣長と白石の際立った対照―『古史通』◎『古事記伝』　7、3、津田左右吉の意見―◎『古事記及び日本書紀の新研究』　8、4、綱豊の下命―「与二佐久間洞巌一書」（白石）　9、5、『大日本史』の編集―『通鑑綱目』◎『古史通』『藩翰譜』『読史余論』『或問』

（三十二）（三十四）削除

二十五章　荻生徂徠

一節　徂徠と宣長との関係朱子学に抗した徂徠学　1、『答問書』三―◎『徂徠先生答問書』『通鑑綱目』『資治通鑑』　2、『弁道』『弁名』―『論語』『史記』『答問書』　3、○『論語徴』―『論語』『論語古義』『六経』　二節　「古文辞学」　1、『六経』という物―『弁道』『答問書』　2、「文章は叙事第一」　3、『六経』の叙する事―『答問書』『太平策』『弁名』上『詩書礼楽』『答問書』中

（三十五）削除

三節　「格物致知」　1、孔子の『詩経』観―『答問書』中『論語徴』『答問書』　2、『大学』にある「格物致知」と

いう言葉―『書』『詩』○『弁道』『大学』『弁名』下

四節　「古文辞学」　1、◎『訳文筌蹄』―『学則』○『蘐園随筆』2、「古文辞学」の　3、崎陽の学―『題言』『太学定本』『語孟字義』『六経』◎『題言十則』

《三十六》

1―4、『徂徠学と宣長学との関係』（村岡典嗣）―『訳文筌蹄』『詩経』　2、徂徠学の急所　3―5、「詩」は言語の教えであるという考えヲ学バズバ、以テ言ウナシ」―『詩経』　4―6、孔子の詩に関する見解―『論語』「（陽貨）」『論語徴』　5―7、「凡ソ言語ノ道ハ、詩コレヲ尽ス」―○『論語徴』　6―8、興観の功の説明―○『答問書』　二節『学則四節―『冠辞考』　1、○『冠辞考』を信じた宣長―「古事記伝解題」（大野晋）『玉かつま』『万葉集』『万葉大考』　2、「調べ」を貴く「真ごころ」　3、◎『歌意考』　4、「調べをもはら」とする言語　5、徂徠の宣長への影響―○『玉かつま』八『あしわけをぶね』『勢語臆断』『気吹舎筆叢』

《三十七》

五節　○『学則』『学則』二―『弁道』　1、「世ハ言ヲ載セテ以テ遷リ、言ハ道ヲ載セテ以テ遷ル。」　3―2、徂徠の思惟の姿―○『弁道』　4―3、学者の思惟という実―○『弁名』下

三節木節　老子　1、「辞ト嫺フ」「事」―『春秋』『史記』太子公自序『学則』三『弁名』下　2、老子の言葉―『史記』○『学則』三『弁道』『弁名』　3、理というものの性質―『弁名』『学則』三　四節七節　自然を取るか歴史を取るか　1、自然と歴史とは、「倫」を異にする徂徠の考え―『弁名』上　2、「理トハ定準無キ者也」―◎『弁名』　3、「述ベテ作ラズ。信ジテ古ヲ好ム」―『論語』「（述而）」『論語徴』

《三十八》（三十三）

五節八節　学問の方法　1、「学ノ道ハ、黙シテ之ヲ識ルニ在リ」―『朱註』『弁道』『弁名』『詩』　2、「吾ガ道ハ、一ヲ以テ之ヲ貫ク」―『易』『礼記』『詩書』　3、「まなぶ」とは「まねぶ」事―『詩書礼楽』　4、徂徠の方法の、宣長による継承―『うひ山ぶみ』◎『玉かつま』八　六節九節　『直毘霊』　1、『古事記』という「物」への推参　2、◎『玉かつま』一　3、「道ということの論ひ」―○『直毘霊』『古事記伝』一『古事記』○『末賀能比礼』◎『くず花』下　4、「無きことを、理を以て、有げにいひなす」―『くず花』　5、◎市川匡の宣長への非難―『古事記伝』◎『古事記伝』「書紀の論ひ」○『古事記伝』七『うひ山ぶみ』

（三十四九）

二十六章　言霊

一節　「性質情状」　1、徂徠学と宣長学との方法論上の共通な性質―『六経』『古事記』　2、物には「おの〳〵その性質情状」が有る　3、不可知論と実証主義　二節　「物の経験」　1、『くず花』下―○『末賀能比礼』◎『くず花』下　2、言葉で作られた「物」の感知―『石上私淑言』一　3、古人の「言問ひ」―『再奉答金吾君』『万葉考』一　4、古人の言意を、己れの言意としようと努める事―『うひ山ぶみ』　5、『古事記』の読み方―『源氏』『紫文要領』　三節　「言霊」の力　1、「徴」―『末賀能比礼』◎『くず花』『古事記伝』　2、「言辞の道」

（三十五3、言霊とは何か―『古事記万葉集』『玉かつま』一　4、『あしわけをぶね』　5、言霊6、意と詞の問題―◎『石上私淑言7、「言詞の文」

（四十）

二十七章　言語共同体

一節　言語による共同体　1、宣命という「事」―『続紀』『続紀歴朝詔詞解』『宣命譜』　2、「言霊」の「幸はふ

国」―『宣命譜』　3、言語共同体を信ずる―○『うひ山ぶみ』　4、◎『石上私淑言』一　5、言語による共同体の姿　6、共同生活の精神　二節「言霊のさきはふ国」　1、「言霊」の働き―○『巻十三』　2、「歌の本義」―◎『石上私淑言』　3、「人に聞かする所、もつとも歌の本義」　4、「言挙げ」すること

（四十一）（三十六）

二十八章　歌を詠む事

一節　歌とは何か　1、「歌といふ物のおこる所」―『石上私淑言』　2、○『あしわけをぶね』　3、歌人等の誤解　4、おのづから開けている「言辞の道」―○『石上私淑言』巻一　5、「人の聞きてあはれと思う」詞の「かたち」―『詠歌大概』二節「歌ニ師匠ナシ」　1、『あしわけをぶね』　2、「身一ッ」の道　3、『うひ山ぶみ』　4、詠歌と歌学―『うひ山ぶみ』三節「人ニ聞スル所」が「もつとも歌の本義」1、歌とは何かと、素直に問う事　2、「情」と「欲」―○『あしわけをぶね』頭註○『石上私淑言』　3、冠り辞という「詞を飾る」為の措辞―『冠辞考』　4、徂徠の「興観ノ巧」―『論語徴』「陽貨」　5、「たゞの詞」

（四十二）削除

二十九章

一節「感慨」　1、天地開闢の時―『石上私淑言』『古今集』序『古今余材抄』『古語拾遺』2、恋情と言う感慨―『古今序』○『石上私淑言』一3、「みづから出す音声」―『古今序』二節「意も事も言もみな相称ふ」構造―1、「実」について―『古事記伝』2、「天之御柱」をめぐる「二神の唱和」―『石上私淑言』3、「情有てみづから出す声」―『古事記伝』4、歌と礼との関係―『古事記伝』○5、言語問題の本質―『石上私淑言』

（四十三）削除

三十章　言霊のさだまり

一節「物のあはれ」　1、「物のあはれ」という言葉　○『紫文要領』2、『紫文要領』と◎『石上私淑言』――『源氏』3、○『玉の小櫛』と○『石上私淑言』十一　二節　実の情　1、おのづからな成り行き――『あしわけをぶね』

三節　言霊学　1、「いともあやしき言霊のさだまり」――『古今集遠鏡』『古今』　2、人間の世界とは、言葉の世界――『古事記伝』

四節　理　1、かく有る事は、その意をなす言葉と一体のもの2、理についての論い　○「書記の論ひ」――『書紀』3、理学に抗した徂徠の考え　4、宣長の理の世界から言語の世界への転向　◎『玉かつま』十　5、「当然之理」という言葉　6、漢意という言葉の使い方――『古今』「真名序」◎『石上私淑言』十一

（四十四）削除

三十一章　学問の方法

一節　古学入門　1、◎『うひ山ぶみ』――『古事記伝』2、倦ずおこたらず、はげみつとめよ3、己れの「山踏み」の跡――『古事記』『古事記伝』『鈴屋集』『うひ山ぶみ』　二節　古言を知る　1、「意と事と言」とは「みな称へる物」――『古事記伝』2、道の学問の本すぢ――『うひ山ぶみ』3、「歌の事」から「道の事」に　◎『玉かつま』七『うひ山ぶみ』　4、己れを知る事――『あしわけをぶね』　5、己れの心に忠実である事――『あしわけをぶね』『記紀』

三節　『紫文要領』　1、「実の情」――○『紫文要領』

（四十五）削除

2、作者の下心の分析――『源氏』「蛍の巻」『紫文要領』『玉の小櫛』3、「見るにもあかず、聞にもあまる」想い

4、宣長の学問と現代風の教養―『源氏物語』

三節　近代科学と宣長　1、物質第一という時代の通念2、宣長の「心のありよう」―

四節　フロイディスム　1、分析的心理学2、フロイトの『自伝』3、フロイトの体質―『文化の不安』「何故の戦争」

（四十六）削除

四節　言語の問題　1、忠告の真意―『古事記伝』○『うひ山ぶみ』2、歌の「似せがたき姿」―3、言語活動の生態―『詞の玉緒』4、「てにをは」の問題―『あしわけをぶね』5、「あやしきさだまり」―○『詞の玉緒』七『万葉』『新古今』6、「口のいひざま、いきほひ」の現すもの―『うひ山ぶみ』『玉かつま』『古今集遠鏡7、己れを語るとは、己れを立て直す事

（四十七）（三十七）

第七篇　迦微とは何か

二三十九十章　おのずからなる道

一節　真ごころ　1、「人の真ごころとは」―○『玉鉾百首』『あしわけをぶね』○『直毘霊』『古事記伝』　2、「動くこそ人の真心」―『古事記』○『玉かつま』十四下書『石上稿』

二節　おのずから　1、「おのづからしかあること」―◎『あしわけをぶね』『万葉』　2、「自然ノ理」―『万葉』3、「物のあはれ」論の「書きざま」―○『うひ山ぶみ』◎『紫文要領』「奥書」『源氏物語玉の小櫛』一・二、『玉の小櫛』　三節　「道の物語」　1、「道の歌」―○『紫文要領』下　2、人の心の「おのづからなる有やう」―『紫

文要領』　3、意欲と感慨―○『あしわけをぶね』（頭註）『紫文要領』上　4、「物をながむる」という事―『あしわけをぶね』『石上私淑言』『石上私淑言』一『三代集』『新古今』◎『石上私淑言』

（三十八）（四十八）

三十章三十三章　『古事記伝』

一節　「ふり」に関して　1、雅言の「ふり」―『源氏』　2、「古言のふり」―『古事記』『源氏』『万葉』『古事記伝』　3、「神々の事態」の「ふり」―『源氏』『古事記』○『古事記伝』一　4、人生の謎という物　二節　「性賓情状」　1、「むかふ」は「身交ふ」―『弁名』物一則『六経』『学則』三『大学』　2、誰もがしている日常経験―○『くず花』『末賀乃比礼』『古事記伝』　3、物に触れる―『古事記伝』　4、有るがままの「かたち」（性賓情状）

三節　迦微とは　1、神の古意―◎『古事記伝』三　2、産巣日神―『古事記』　3、万物生成の思想―『古事記』『古事記伝』

（三十九）三節（四十九）四節　迦微の名

1、言葉とは私だと断言出来る喜び　2、迦微という名　3、◎『古事記伝』三　4、迦微の徳　5、物に名付けるという行為―『古事記』「神代一之巻」　6、神の名を得ようとする行為　7、神の命名というひたむきな行為―『古事記伝』三　8、「物のかしこきを知る心」　五節　まごころの姿　1、人と禽獣とのけぢめ―『石上私淑言』―2、神の経験の二重性―○『くず花』下

（五十）（四十）

四節六節　上田秋成との「日神論争」　1、　天照大神即ち太陽―○『古事記伝』◎『呵刈葭』「鉗狂人上田秋成評同弁」『胆大小心録』中　2、「やまとだましひ」の「臭気」―『馭戎慨言』『鉗狂人評』　3、秋成の基本的な論難―

『鉗狂人』『雨月物語』『鉗狂人』『記紀』『鉗狂人』　五節七節　村岡典嗣の古伝説研究　1、「本居宣長の古伝説信仰の態度」―『直毘霊』『古事記伝』『本居宣長』（村岡典嗣）　2、理解する所と唱道する所　3、宣長の思想の自発性に触れる事　六節八節　『源氏』による開眼　1、見る人の怪しむような姿―『源氏』『紫文要領』「後記」　2、◎『玉かつま』七

（四十一）

三十一章（五十一）削除

七節　学者の良心　1、学者の特権意識に対する嫌悪2、◎『玉かつま』七　3、学者の目的―『うひ山ぶみ』

八節　「学びやう」　1、式部との附合いの経験そのもの―『源氏』　2、彼自身の最も内的な性質の表現―『玉鉾百首』『古事記』　3、「まごころ」という言葉の真意―『源氏』○『くず花』上、○『玉かつま』一『古事記伝』九　4、「はかなく、しどけなく、おろかしき」もの　5、「持て生れつるまゝの」能力―『玉かつま』四『源氏』『古事記伝』三十七『冠辞考』

（五十二）

三十四章　上田秋成

一節　「古学の眼」　1、「少彦名神」の事―◎『呵刈葭』『鉗狂人』　2、古学の大事　3、古伝の「趣」或は「姿」―『古事記伝』十二　4、人生を知るとは―『あしわけをぶね』『万葉代匠記』二、○『紫文要領』十一　5、日神に関する論争6、古伝の問題とは、言語の問題　7、言語と論理との問題

（四十二五十三）

二節　「日本魂」の偏　1、◎オランダの「地球之図といふ物」　2、「古語のふり」―『古事記伝』『古事記』　3、

歌の「実」と道の「実」との間を往来する事―○『うひ山ぶみ』　4、「物にゆく道」　1、「其はただ物にゆく道こそ有りけれ」―『日本紀』○『直毘霊』　2、「神代の古伝説」―○『古事記伝』「総論」

（四十三）

三節　3、宣長の古学の原理―『古事記伝』「神代一之巻」（五十四）　四節　神のあやしさ　1、迦微の古意―『古事記伝』　2、神典の「あやしさ」―○『玉かつま』五『三輪物語』　3、神書の「あやしさ」の合理的処理　4、謎が古伝説の本質を成す事　5、自照を通じての『古事記』観照の道―『古事記伝』「神代一之巻」『玉かつま』『古事記』○『うひ山ぶみ』

四節五節　宣長と真淵　1、万葉学を大成した真淵の最晩年―『古事記』『古事記伝』『直毘霊』　2、真淵が考えていた古道―『国意考』○「斎藤信幸宛の書簡」（明和四年十二月）　3、真淵の原型と宣長流の摸倣―◎『国意考』『直毘霊』　4、◎『くず花』5、思想が演ずる劇―『国意考』『直毘霊』『くず花』『学則』『六経』『弁道』『弁名』

（四十四）五十五）削除

三十二章三十五章　荻生徂徠

一節　徂徠の影響　1、徂徠という豪傑の全幅の姿―○『気吹舎筆叢』　2、「学問は歴史に極まり候事に候」―○『答問書』　3、学問の問題を建て直す事―○『学則』一　4、歴史の実物―『学則』四『答問書』下　5、日常の歴史感情―『弁道』『弁名』　6、常套的な歴史意識　7、儒学という精神的遺産―『学則』　二節　孔子の祖述　1、体得された生きた知慧―『弁道』　2、内面化による生活環境の所有　3、個性化された「活物」

（五十六）

三十六章　賀茂真淵の「神の道」

一節　「人代を尽て、神代をうかゞはん」　1、真淵の遺恨―「宣長に宛てた書簡」（明和六年）○「鈴木梁満宛」（明和六年三月）○『賀茂翁遺草』　2、『祝詞考』の書上げ―『延喜式祝詞解』『出雲国造神賀詞』『祝詞考』下『神賀詞』　3、斎藤信幸宛の書簡（明和五年六月十八日）　4、『万葉』の「ますらをのてぶり」―『万葉大考』『源氏』『祝詞考』

二節　真淵の苦衷　1、『古事記』という越え難い絶壁―『古事記伝』『万葉』『古事記』　2、『万葉』『源氏』という「文事」―『玉かつま』『万葉』『源氏』　3、『玉かつま』二の巻―『古事記伝』　4、「我は神代を以て、人事を知れり」―『うひ山ぶみ』『古事記』註釈の仕事『直毘霊』『古事記伝』『うひ山ぶみ』　3、「迦微」5、徂徠の歴史観の、深刻な意味での宣長の摸倣―『うひ山ぶみ』『学則』　6、真淵の「神の道」という言葉の古意に関する吟味―『古事記伝』三

（四十五五十七）

三節　真淵の問題の暗さ　1、『国歌八論』　2、◎『再奉答金吾君』　3、真淵の携わっている問題自体の暗さ―『万葉集大考』○「梅谷市左衛門宛」（宝暦十三年）　4、神の「拝礼」―『万葉』○『賀茂翁遺草』四節　真淵の足どり　1、○『祝詞考』―『出雲国造神賀詞』　2、神という古言の古意―○『古今集序別考』『万葉』五節　宣長の『古事記』の訓詁　1、国語の語感の訓練　2、「言辞の道」を探る宣長の眼　3、真淵が遺した『古事記』神代の仮名書―『古事記伝』　4、「天若日子」の物語―◎『古事記伝』十三　5、宣長が指摘した真淵の決定的な誤り―『古事記』　6、真淵の古言を前にしての曖昧な態度―『祝詞考』『古事記伝』『出雲の神賀詞』『大祓詞』○『大祓詞後釈』『古事記伝』『祝詞考』○『考含祝詞考』

（四十六五十八）

六節　二人の命名の相違　1、雅言と古言―『古事記』○『万葉集大考』　2、「心詞」という言葉―『万葉』『万葉集大考』『記紀』『祝詞考』『文意考』○『歌意考』『古事記』　3、「歌のこ―ろ、しらべ」から、「言の振り、格」へ―○『玉かつま』　4、「天地のしらべ」を提げて『古事記』の裡に　七節　真淵の「古学」への「いざなひ」

1、『祝詞考』―○『うひ山ぶみ』『日本紀』『古事記』○『祝詞考』『古事記伝』　2、「上ッ代の正実」を決定するような力―『古事記』『日本紀』『書紀』『古事記伝』○『うひ山ぶみ』　3、「意と事と言とは、みな相称へる物」―『書紀』『古事記』　4、「形」を取る力―『古事記』○『玉鉾百首』　5、「歌の事」に関する真淵と宣長の相違―『大考』㊀『国意考』『古事記』　6、はち切れる「もの、あはれ」―『万葉』『古事記』『紫文要領』『石上私淑言』『源氏』『玉の小櫛』

（五十九）削除

三十七章―「物のあはれ」

一節「物のあはれをしる」という事　1、「あはれ」という平語―『古今集』『石上私淑言』『万葉』『土佐日記』

2、歌道の極意は、「あはれ」の言に帰するという開眼―『古今序』『土佐日記』　3、『土佐日記』　4、「物の哀をしる」という経験―『紫文要領』　5、「歌とは何か」という題詠　二節『紫文要領』　1、『源氏』から何を得たか―『紫文要領』2、「風儀人情」という言葉―『紫文要領』『源氏』3、「和漢無双の妙手」

（六十）削除

三節「源氏物語の大綱総論」　1、卑下の衣を着た作者の確信―『源氏』『玉の小櫛』　2、「物語のいでくる所」―「蛍巻」3、様々な意匠から解放された人間式部―『源氏』　4、国語の言泉―『あしわけをぶね』『源氏』　四節「蛍巻」　1、「風儀人情」の多様な「かたち」　2、「人にしたがはんとては」という式部の「下心」　3、事物を見

聞きする働きの本来の性質

（六十一）削除

五節　宣長の歌学の原理　1、眼前にある『源氏』という具体的な事実2、「和歌は言辞の道也」――『悦目抄』3、歌の源泉に向う烈しい反省――○『悦目抄』　六節　まことの心　1、「歌道のまこと」に還る事2、人間のまことの心――『紫文要領』3、「心を制する」技4、武士の場合　七節「言辞の道」　1、式部という実情の人　2、「あゝはれという嘆息の声」　3、「言辞の道」4、情の動き5、純粋な感動　6、歌人の行く「言辞の道」――『古今序』

○『直毘霊』

（六十二）（四十七）

第八篇　「あやしさ」の「かたち」

三十三八章　『古事記』の注釈

一節　宣長と真淵　1、学問上の確信――○『古事記伝』『古事記』　2、真淵の神人同形説――『古事記』『万葉』　3、真淵自身が招いた難局　4、本文に見えたるままというような解――『古事記』　5、本文のないところに注釈はない　6、真淵の「上ッ代の事実」を貫き通す説明原理――『万葉』『古事記』　二節　「から心」からの離脱　1、蕃山の神典寓言説――『玉かつま』五『万葉』　2、上代の人々の、神に関する経験的事実　3、伝説という巨きな肉体　4、宣長が出会った難局――『三輪物語』　三節　「あやしき事の説」　1、◎「あやしからぬはなき」2、説明の適わぬ読書経験が蔵する不思議の尊重――『源氏』

（四十八）（六十三）

四節　神典の尊さ　1、言伝えの徳―『古事記伝』『くず花』○『まがのひれ』　2、両者は相違するという端的な事実　3、○『古事拾遺』―『まがのひれ』五節　言伝えの徳　1、肉声のニュアンス―『古事記』　2、言伝えの遺産　3、生きた智慧―『直毘霊』4、「あやし」という絶対的な「なげき」―『源氏』　5、古人の言語行為の現場―『古事記伝』

六節　宣長の注解　1、「次」という言葉　2、時空の根本観念の質　3、物語に見えるがままの「あやしさ」の「かたち」

（四十九）

三十四章　上田秋成との論争

一節　古学の眼　1、論争の締め括り―○『呵刈葭』下　2、学者の立場　3、一枚の真物―◎「百枚の色紙」4、贋物に欺かれない事と真物を信ずる事　5、自然に従って運転する必然の事の成り行き―◎「秋成反論」　6、宣長の譬え話―◎「宣長反論」7、真を得んとする心と偽を避けんとする心　二節　古伝説　1、万人が信ずべき事　2、「運転は神たちの御しわざ也」―『記紀』　3、難者匡麻呂への宣長の答え―『古事記伝』○『くず花』下　4、世にも「怪き」「可畏き」物を信ずる―『古事記』　5、あるがままの自然の感じ方　三節　「おの〳〵その性質情状」との出会い　1、古人の「心ばへ」　2、自然の姿　3、己れの運命

（五十）

第九篇　宣長の死生観

三十五章　生死の経験

一節　神道の安心　1、○『答問録』と○『直毘霊』　2、「人々の小手前にとりての安心はいかゞ」　3、信仰の絶対性　4、宣長の説明◎『答問録』　5、理解の困難　6、安心なきが安心　7、悲しみに堪えぬ心　二節　死という事件　1、「あはれを知る」とは何か　2、『源氏』の熟読―○『紫文要領』『記紀』「神代之巻」　3、◎『玉の小櫛』　4、「雲隠の巻」という表現―「幻の巻」　5、死という物　6、死の観念―「雲隠の巻」　7、死の予感　三節　上古の人々の宗教的態度　1、「黄泉神」の姿―『古事記伝』　2、「我は神代を以て人事を知れり」―○『古事記伝』　3、上古の人々の宗教的経験　4、人々の信仰態度　5、「可畏き物」―『源氏』論　四節　生死の経験　1、「神世七代」の伝説　2、「神世七代」の物語　3、人間の変らぬ本性という思想　五節　生死を観ずる道　1、伊邪那岐神の嘆き―○『古事記』『万葉』　2、最後の別れ―○『古事記』　3、伊邪那美命の嘆き―○『古事記』　4、宣長の直覚―「雲隠の巻」　5、人の一生　6、直かな表現　六節　純粋な精神活動　1、死という物の正体　2、伊邪那岐命の涙―『答問録』『古事記伝』　3、死の像　4、想像の力　5、「御霊」の徳　6、一種の精神主義―『遺言書』

（註）

（1）『本居宣長の世界』（野崎守英、塙書房、一九七二年五月）、『本居宣長』（相良亨、東京大学出版会、一九七八年九月）、『本居宣長―言葉と雅び―』（菅野覚明、ぺりかん社、一九九一年三月）『国学の他者像―誠実と虚偽』（清水正之、ぺりかん社、二〇〇五年四月）があり、近年、『本居宣長』（熊野純彦、作品社、二〇一八年九月）が出版された。

（2）拙稿「小林秀雄のベルクソン論の詳細目次」（佐藤雅男、「専修人文論集93号」二〇一三年十月）。尚、『小林秀雄「感想」用語索引』（佐藤雅男、印刷フェデックス）は、私家版として所有する。また『小林秀雄　創造と批評』（佐藤雅男、専修大学出版局、二〇〇四年四月）には、章立てに『感想』（ベルグソン論）と『本居宣長』に関するものが欠けているので、本稿は、その付加としての論考である。

（3）昭和時代に『本居宣長』が出版され、逸早く論じたものに、『小林秀雄を〈読む〉』「1、『本居宣長』という事件」（「叢書・知の分水嶺１９８０・S」大江健三郎、山口昌男、前田愛、保田興重郎、吉本隆明、株式会社現代企画室、一九八一年五月）がある。それ以前には、吉本隆明が、『悲劇の誕生』（筑摩書房、一九七九年十二月）に、取り上げていた。その後、『本居宣長』に関する指摘は、『小林秀雄論』（粟津則雄、中央公論社、一九八一年九月）『小林秀雄とその時代』（饗庭孝男、文藝春秋、一九八六年五月）にされる。これらには、この作品を大掛かりな批評の一種と見做し、その思想的可能性と限界を指摘する傾向が主流であった。平成時代になってからは、『小林秀雄　声と精神』（高橋英夫、小沢書店、一九九三年十月）があり、『小林秀雄―近代日本の発見』（佐藤正英、講談社、二〇〇八年三月）には思想史家としての特質に関する本質的問題が提起された。。また小林秀雄論を『本居宣長』に限定し、さらに一般読者への解説を試みた、『小林秀雄の日本主義―「本居宣長」論―』（佐藤公一、有限会社アーツアンドクラフツ、二〇一〇年四月）同著者の『小林秀雄の秘密―「本居宣長」をわかりやすく―』（二〇一九年一月）が出版された。そして令和の時代になって、本格的に『本居宣長』に主題を絞った『小林秀雄の悲哀』（橋爪大三郎、講談社、二〇一九年二月）が出版される。

（4）小林は一九五八年五月から、一九六三年六月まで雑誌「新潮」に『感想』（ベルグソン論）を発表した。その間、一九六〇年七月に「本居宣長―『物のあはれ』の説について―」を発表し、それが『本居宣長』の端緒としてエッセイである。また前年五月の「好き嫌い」（『文藝春秋』）から、一九六四年六月の「道徳」や八月の「常識について」（福沢諭吉・デカルト・ベルグソン・伊藤仁斎などの言及）まで、一連の近世儒学論を発表する。一九六一年八月に「徂徠」や同年十一月に「弁名」があり、一九六二年二月の「考えるという事」も宣長に始まるが、それも徂徠への論考が主眼になった。こうした近世思想論には、他にも様々な対象が取り上げられたが、それらも徂徠の古文辞学の具体的な解説に収斂され、一連の近世論とは小林独自の荻生徂徠論の一種である。また一九六二年五月の「福沢諭吉」や十一月の「天という言葉」なども、これらの儒学論の持続的生命と深く絡んでいる。

そして、一九六三年一月の「哲学」（伊藤仁斎論）には、「丸山真男氏の、『日本政治思想史研究』はよく知られた本で、社会的イデオロギイの構造の歴史的推移として、朱子学の合理主義が、古学古文辞学の非合理主義へ転じて行く必然性がよく語られている。（中略）特に徂徠に関して、私は、いろいろ教えられる点があったが、私としては、ただ徂徠という人の懐にもっと入り込む道もあるかと考えている。」と言及する。

この対象の内部に入り込む方法とは、『本居宣長』に付加された江藤淳との対談では、「当今の宣長研究は、皆、近代科学の実

証主義に強く影響された観点に、それと意識しないで立って行われて来た。言わば、形而上なるものに対する反感から出発していたと言っていい。これをどうにかしなければならぬ事には、早くから気付いていた。方法はたった一つしかなかった。出来るだけ、この人間の内部に入りこみ、入りこんだら外に出ない事なんだ。この学者の発想の中から、発想に添うて、その物の言い方を綿密に辿り直してみる事、それをやってみた」（『本居宣長』をめぐって」、『新潮』一九七七年十二月）と言う。小林にとって、その対象がベルグソンであれ、徂徠であれ、それが宣長になっても、そうした方法に変化はない。その思想表現を辿ってみれば、ベルグソン論や近世儒学論は、『本居宣長』へと段階的に飛躍する役割を果たし、ベルグソン論の全集収録の禁止や、連載『本居宣長』の徂徠論の削除も、その筋にある事が理解出来る。本稿の「詳細目録」は、外堀や内堀よりも、さらに建造物の屋内の設計に関りがある。いわば迷宮的なテキストをより精密に読解するために自由に出入り可能な地図の一種である。だが、やはり小林の文章は、なかなか自由には読解出来ない側面がある。出来るだけ内部に入り込むことに努めて、本文理解に有効な内密的通路を発見しなければならない。そして荻生徂徠や賀茂真淵や上田秋成などとの関係から生じた「思想劇」の問題を軸にして、論考を進めてみたい。

また、大幅な削除（回）や『考えるヒント2』などに収録された徂徠論の意味を検討する上で、丸山真男の『日本政治思想史研究』の「第一章　近世儒教の発展における徂徠学の特質並にその国学との関連　第三節　徂徠学の特質」の引用部分（『学則』『弁名』『弁道』『答問書』等々）とは、両者ともに原文を省略したり、口語訳などもされ、引用は全くの同一ではないが、相当重なるので、単行本の『本居宣長』に引かれた徂徠の主要な原文を引き、『日本政治思想史研究』の目次も併記して措こう。

「世ハ言ヲ載セテ以テ遷リ、言ハ道ヲ載セテ以テ遷ル。道ノ明カナラザルハ、職トシテ之ニ是レ由ル」（『学則』二）。「天の道といひ地の道といふ者あり。蓋し日月星辰繫り終、風雷雲雨行き、寒暑昼夜往来已まず。深玄なるや測るべからず。（中略）徐ろにして之を察すれば亦其の由る所の者有るに似たり。故に之を地道と謂ふ。皆聖人の道有るに因りて借りて以て之を言ふのみ」（『弁名』上）。「理は定準なきもの」（『弁名』下）「道とは統名なり。礼楽刑政凡そ先王の建つる所のものを挙げて合せて之に命ずるなり。礼楽刑政を離れて別に所謂道なる者有るに非ざるなり」（『弁道』）「見聞広く事実に行わたり候を学問と申事に候故、学問は歴史に極まり候事に候」（『答問書』上）

『日本政治思想史研究』丸山真男

第一章　近世儒教の発展における徂徠学の特質並にその国学との関連

第一節　まへがき—近世儒教の成立

シナ歴史の停滞性と儒教—日本における儒教—近世儒教成立の客観的条件

—その主観的条件—近世儒教の展開を辿ることの意味

第二節　朱子学的思惟様式とその解体：

朱子学の構造—朱子学的思惟の特性—徳川初期の思想界におけるその特性の反映—朱子学的思惟方法の全盛期—寛文より享保にかけての思潮の急速な推移—朱子学的思惟方法の分解過程〔山鹿素行—伊藤仁斎—貝原益軒〕

第三節　徂徠学の特質

二つの事例—徂徠学の政治性—その方法論—天の概念—道の本質—

道の内容—道の根拠—徂徠学における公私の分裂—元禄より享保に至る社会情勢—政治組織改革論

第四節　国学とくに宣長学との関連

徂徠学の普及とその反流—蘐園学派の分裂—徂徠学以後の儒学界の衰頽—

国学と徂徠学との否定的関連—その思惟方法の共通性—積極的関連の種々相—関連の総括併せて国学の思想史的地位

第五節　むすび